<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料　第112号　毎月発行

発行2021年（令和3年）9月16日　木曜日

2021年（令和3年）9月16日　木曜日

【当新聞発行責任者兼編集長兼記者紹介】

【砂越　豊】

宮城県生まれ、68歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナ禍を乗り越えて4作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。

「廃藩置県150周年」を契機に東北に道州制導入論議を再び！

旧藩区割りによる再編成でいがみ合わない東北創出も

廃藩置県百五十周年

あまり知る人もいないかもしれないが、先月の八月二九日は、明治新政府による廃藩置県実施から一五〇周年の「記念」すべき日であった。（千八百七十一年…明治四年）

そこで今回号のトップ記事は、これを取り上げてみようと思った。

そして、この際、廃藩置県廃止⇒中央集権制打破⇒地方再生⇒再びの道州制標ぼう⇒東北再興と話題を展開してみたいと考えた。

東北全体にとって、幕末の奥羽越列藩同盟、戊辰戦争敗戦、そして新政府による仕置き、廃藩置県と続く、中央政府のいじめが始まった時であり、百五十年経ったいま、それをひっくり返してはどうかという投げかけでもある。

新型コロナ禍対応で全国の知事の反発

ところで、新型コロナ禍で良かった点などはなかなか思いもつかないことだろうが、ひとつだけ良いことがあったと筆者は考えている。

それは、全国の知事の内、何人かが政府の新型コロナ禍への硬直的な対応に異を唱えたことだ。

これまでそうしたことは考えられなかったが、わずかながらではあるが、この国の変化を感じさせる出来事であった。

各知事の「異議」の最終的な行先に関しての議論はともかく、時代遅れでちぐはぐ、何でもかんでも全国一律の中央集権的な統治手法に、声に出して異議を唱えたことは画期的である。

このままの勢いで、中央集権体制を切り崩していって欲しいと願う。

考えるまでもなく、この国がいまだに中央集権体制を敷いていること自体が驚くべきことである。

言い過ぎかもしれないが、この国はまだ、明治時代の富国強兵の中央集権体制の名残りを後生大事に維持し続けているとは言えないか。そうだとしたらまことに奇妙奇天烈なことである。

さらに、海外と比較してみたい向きには、先進国で日本と同じシステムを採用している国があるかどうか確認されてみてはいかがだろうか。

そうすれば、この国の時代錯誤的感覚にあきれることだろう。

忘れられた道州制

少し前に大きな話題を集めた道州制を思い起こして欲しい。

いま思えば、前の道州制論議への盛り上がりは、しっかりした理論的根拠に欠け、一種の浮ついたブームに乗っただけといってもいいように感じる。

それは、強引に進めた市町村合併からの発展形としての道州制に過ぎず、道州制実現まで一挙に上り詰めていくエネルギーに欠けていたようにも思う。

また、大都市集中への見直し策としての地方再生の一環しての道州制ということもあったが、大都市圏の反対でいとも簡単に腰砕けとなり、自壊したようにも思える。

そこで今回、新たに「脱中央集権」の象徴としての旗印を掲げ、新たな枠組みを提示する道州制というのはどうであろうか。

新型コロナ禍で活性化したように見える全国知事会に、道州制論議を復活させ、発展させる兆しはないのだろうか。

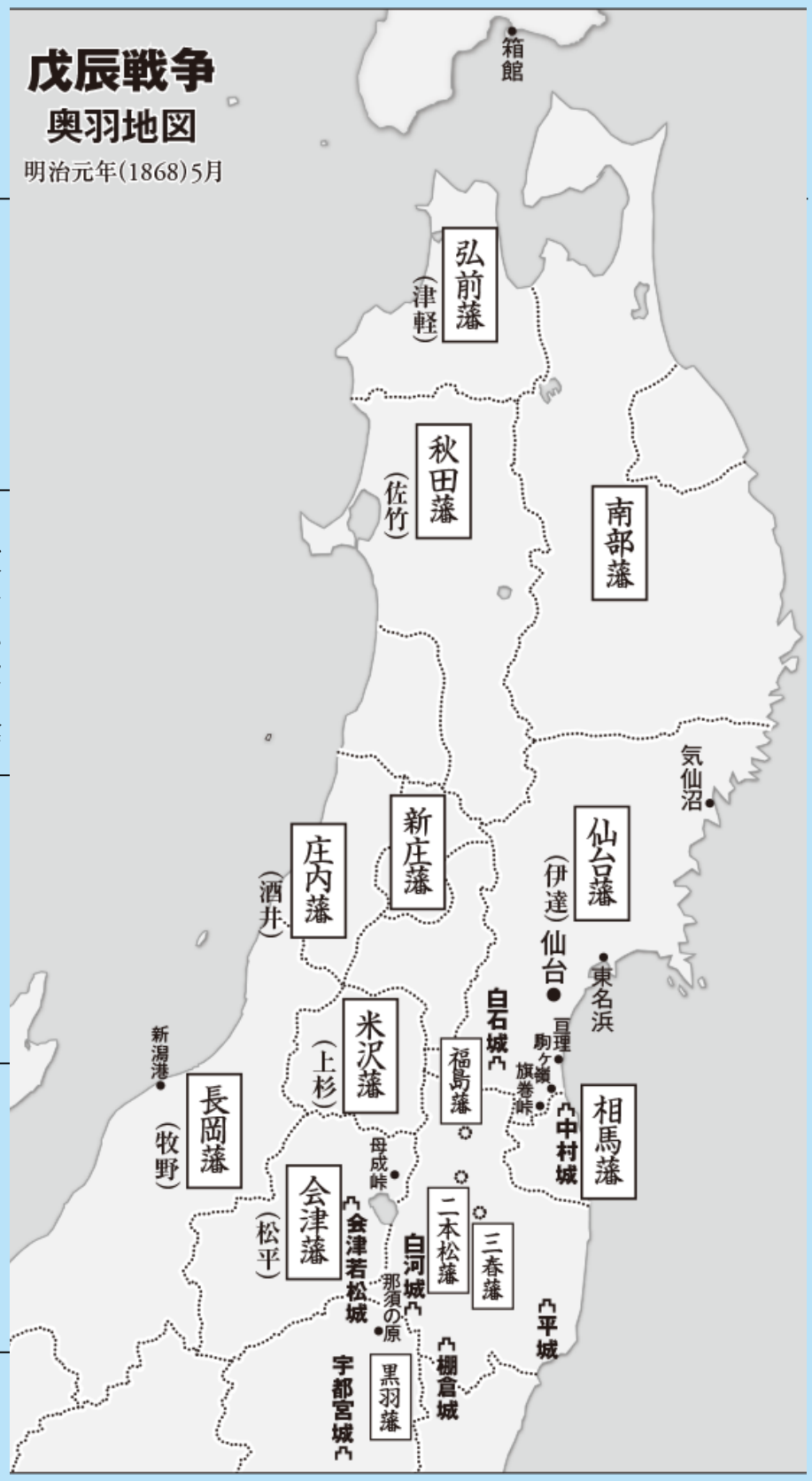
これからの日本を考えたとき、また明治維新以来「負け続け」の東北の未来を考えたとき、「脱中央集権」は不可避である。ぜひこうした方向に議論をもっていっていただきたいと願う。

大都市圏と地方の格差は拡大する一方

簡単に地方創生などというが、実際のところ、東北地方の疲弊はひどいレベルに至っている。

筆者は、ぜひ大都市圏の知事たちに、疲弊した東北地方をじっくり体験するツアーを設定してはどうかといつも思う。百聞は一見に如かず、である。

東日本大震災の復興の影に隠れて、ほとんど話題にならない内陸部の衰退ぶり



廃藩置県以前の奥羽越列藩同盟地図

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

にはきっと言葉を失うことだろう。

単なる人口減少というだけではない。「まち」が壊れているといった表現がしっくりくる。また、ひとところ言われたシャッター通りどころはなく、打ち捨てられ、壊れた店舗が目抜き通りに多数あり、また撤去された店舗の跡地が空き地だらけになっているような「まち」があちこちに見られる。人口が加速的に減り続ける「まち」の収入増への展望はまったく描けず、税収は減り続け、他方、従来の「まち」のシステム維持のための固定費でどんどん赤字が増える。唯一の頼みの綱である地方交付税はいったいいつまで維持できるのだろうか。多くの「まち」の「財政破綻」は近いうちにニュースにもならないくらいに当たり前となるだろう。そうして、「順当」に行けば、最終的な地方の近未来は「崩壊」しか見えない。それでも、政府をはじめ、地方の困窮にいつも直面している全国知事会は動かないのだろうか。

だからこそ、しっかりした理論根拠を持つ「新・道州制」で、こうした流れを食い止め、真の地方活性化を目指して欲しいのだ。

廃藩置県は「県」がまとまるのを防いだ？

話はまた廃藩置県のことに戻るが、いまの東北の各県は、明治新政府の非常に意地の悪いやり方で作りあげられたものと筆者は思っている。

奥羽越列藩同盟による抵抗の意趣返しとして、旧藩名をひとつも残さず、新たな県名にしただけではない。

どういうことかといえば、かつての奥羽越列藩同盟の「藩」のように、新たな「県」がまとまって再び新政府に対抗するような素地を完全に排除したのである。

つまり、かつての奥羽の各「藩」を分割して、他の「藩」にむりやりくっつけて、新たな「県」としたのだ。

そうなると、「県」の内部は、それぞれの旧藩のやり方とそぐわない案件が出現するたびに「内紛」が起きて、とてもひとつにまとまらない。ましてや、新政府に反抗することでもまとまることはなく、いつも「県内」でいがみあっていることになる。

結果、新政府は「県」の反乱に少しもおびえることがなくなる、というわけである。

なんとも巧妙というか、意地が悪いというか、とんだ知恵者がいたものだと感心する。

筆者のつたない経験ではあるが、数年前、そうした「痕跡」を目の当たりにしたことがあった。

岩手県盛岡市で、とある小さな集まりがあったが、そこには地元の名士や議員さんがいて、少々お酒も入っていたこともあり、議論がヒートアップしたところで、とんでもない、驚くべき発言が、ある議員さんから飛び出したのだ。

「われわれは“南部藩の身分の高い家柄につながる子孫”なので、そうではない身分の低かった人たちとはいっしょにやれない、ましてや他藩の末裔の人たちとはいっしょにやれない・・・」と。

それを耳にして、一瞬、いま自分がどこにいるのかが分からなくなった。江戸時代か、明治初期にタイムスリップしたかとめまいがした。

気を取り直して考えてみたが、確かに新・岩手県は、旧南部藩の下北半島部分が分割され、新・青森県に統合され、南側は旧伊達藩が分割された地域と合体したことを思い出した。

しかし、それを考慮してもなお、いまだに南部藩の亡霊が生きているとは信じがたい出来事だった。

これでは、県として一体になることなど、かなりむずかしいと感じた。

ひょんなことから、明治新政府のたくらみは、百五十年近く経っても「有効」なことを確認することになった。

岩手県に限らず、東北はかつて「奥羽越列藩同盟」で新政府軍と戦った。それで意地の悪い新・県統合を仕掛けたのだろう。

新政府に抵抗した藩名は残さなかった

各県内だけでなく、なかなか東北がひとつにまとまらない理由のひとつにこうしたことが影響している可能性は否定できない。

明治維新の東北いじめの痕跡は、別な形で、いまの東北に生きているのだ！

ならば「旧藩」に戻した道州制を！

それならば、現在の県を再編成して、出来る限り旧藩の地域同士、現在では別々の県になっている地域を復活結合しての新たな県を作り出すのはどうであろうか。

また宮城県出身の筆者のつたないアイディアで申し訳ないが、岩手県南部の「旧伊達藩」エリアの文化は、宮城出身の筆者には非常になじみやすいのだ。

他県という感覚がなく、むしろ懐かしい感じがする。

このエリアが、新宮城県に、いや、新道州制のひとつのエリアにまとめられるのならば、非常にうれしい限りである。

このことはなにも岩手県に限ったことではないだろう。

青森県の津軽と下北の仲の悪さも有名な話である。

福島も同様である。浜通り、中通り、会津と三分している。

ほかにもたくさんのケースがあるだろう。

こうした観点を踏まえ、目指すべきは、「文化的アイデンティティー共有体」としての新たなエリアづくりである。「異文化」同士でいがみ合うエリアではない。

いっその事、北海道・東北州にしては？

東北にとっての道州制でもうひとつ問題がある。

もし「州都」を決めるとなれば、仙台が第一候補となるのはだれもが認めるところだ。

それは宮城以外の五県は仕方ないと思いつつも、感情的には受け入れがたいものがある。

とはいえ、東北六県の県庁所在地のうち、経済も人口も、仙台市が群を抜いているのはまちがいない。

他県の県庁所在地が「州都」ではおさまりが悪かろう。

そのことを分かってはいるが、主従関係のような位置となることが受け入れがたい。「州都」となれば、さらにこの格差が広がるにちがいない。

では、どうすればよいか。

ひとつ方法がある。それは、北海道と東北州が一体化すれば良いのだ。

そして「州都」は札幌市にして、仙台は、他の東北五県の県庁所在地とともに、「副州都」にすればよいのではないか。

巨大な北海道・東北州

東北州だけでは、経済的にも「州」としての「独立」はなかなかむずかしい。

しっかりした基盤を持つ「州」になるには、ある程度の規模が必要だ。

この点で、東北はこれまで中央に依存し過ぎてきた。まるで「独立」を阻止するように、がんじがらめになってきたと感じる。

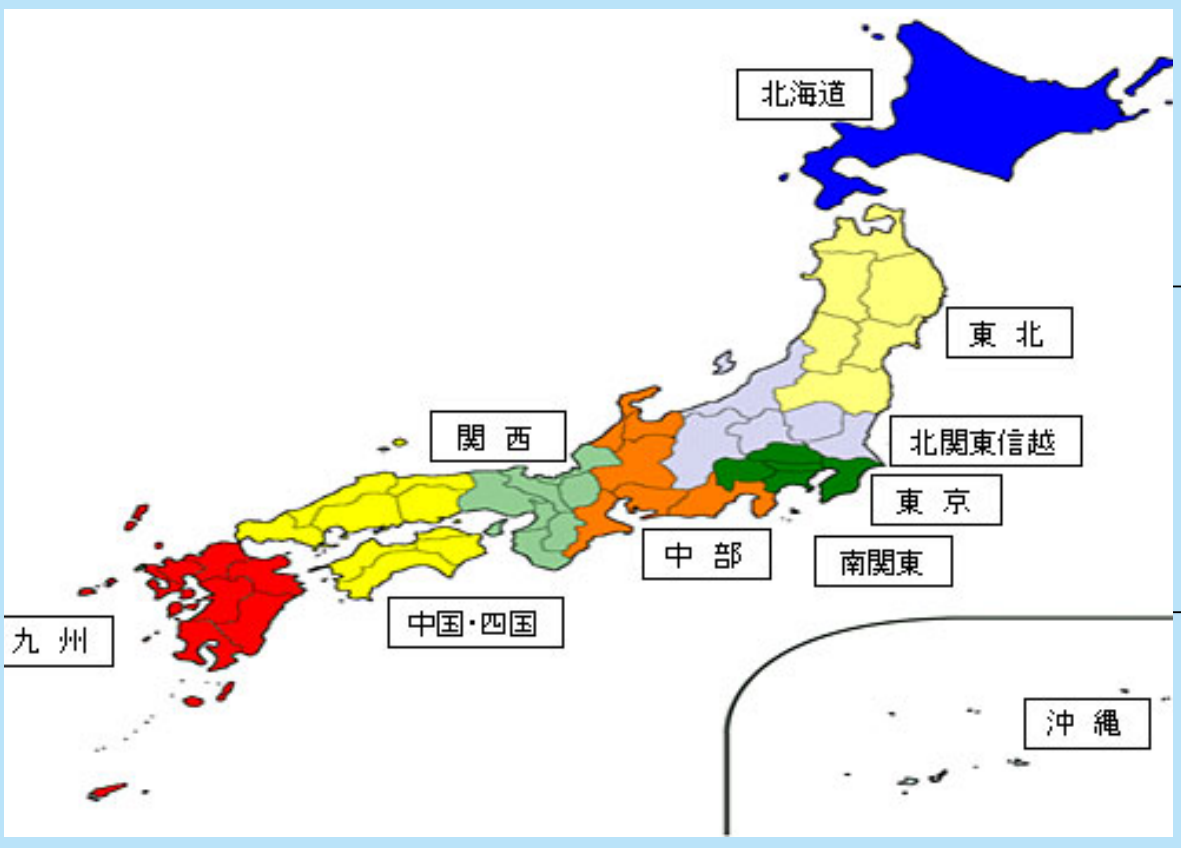
しかし、北海道と一体化すれば、人口もより大きく、何よりも広大な面積の「州」ができる。

国内の大都市圏に依存しない経済も可能だろう。直接的な海外交易も可能になる。広大な地域に眠る資源の活用も可能になる。何よりも人材交流の活発化が、この地域の活性化につながっていくのではないか。

また、北海道と東北には、一体化することの感情的なあつれきも存在しない。

お互いに、辺境扱い同士でうまくいくのではないか。

「他州」がうらやましく思うほどの条件が揃っている。



かつての道州制モデルのひとつ

優秀な人材も集まる

もしこの「北海道・東北州」が実現するならば、一番期待できるのは、「優秀な人材」が集まってくるということだ。

資源があっても、広大な土地があっても、優秀な人材がいなければ、宝の持ち腐れである。これは十分に期待できる。

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

第85回

水産業再興のための料理レシピ紹介

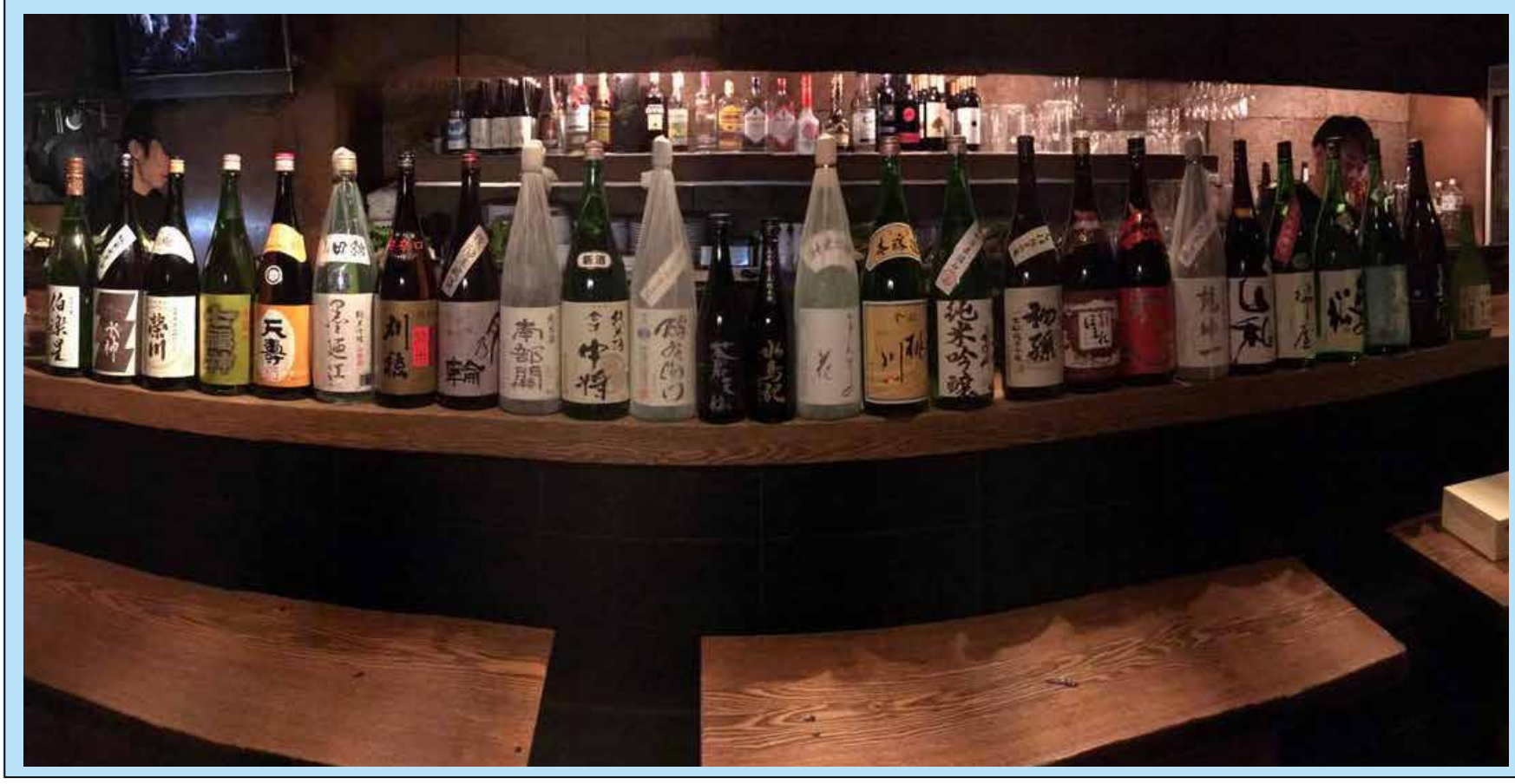
《カツオと野菜のビビンバ》

郷土料理愛好家
松本由美子氏

―材料―　<2 人分>カツオ 150g、にんじん 50g、サニーレタス 1 ～ 2 枚、小ネギ 15g 、 白菜キムチ 30g 、ご飯 300g　　<調味料> コチュジャン 大 1 、酢 大 1 、醤油 小 1、おろしニンニク　小 1/2

―料理方法― ①　①　調味料を合わせます　②　カツオは切り身にして調味料と和えて置きます　③　にんじんをおろし金で千切りにします ④ ご飯にサニーレタスを敷き、カツオを乗せます。 にんじんやキムチ、青じそなど盛り合わせします

東京のコロナ感染は少し落ち着いてきたように思えるのですが、どうでしょうか？もうそろそろ再開の準備に取りかかってもいいのでしょうか？ただ、すぐというわけにはいきません。状況次第ですがどんなに早くとも年末近辺でしょうか？早くみなさんに会いたいです！そして美味しい東北地酒をみんなと酌み交わしたいです！



【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

世界遺産登録から一〇年

震災の年の世界遺産登録

岩手県平泉町にある中尊寺、毛越寺を始めとする遺跡が世界遺産に登録されて今年で一〇年になる。一〇年前と言うと、まさにあの東日本大震災が起きた年である。三月一一日に起きたあの巨大地震に伴う被害のあまりの大きさに打ちひしがれていた折も折、その年の六月二九日に、平泉の「仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が、東北初の世界文化遺産として登録されたのである。これは、大変なことが続いていたあの時に触れた嬉しいニュースであった。

とりわけ、平泉の文化遺産は一度、登録延期の憂き目に遭っている。二〇〇八年のことであった。「『顕著な普遍的価値』が十分に証明しきれていない」というのがその理由であった。それから三年後の再挑戦で見事登録を果たしたということで喜びもひとしおであった。

世界遺産に登録されるためには

中尊寺、毛越寺、観自在王院跡、無量光院跡、金鶏山の五つの構成遺産がなぜ世界遺産となったのか。世界遺産に登録されるためには、当然のことながら多くの要件を満たすことが必要である。とりわけ重要なのが、その「顕著な普遍的価値」があるということである。それがあると証明するためには、①世界遺産委員会が示す一〇の価値基準のうち最低一つに該当すること、②真実性・完全性を満たすこと、③有効な保存管理体制が整備されていること、を示す必要がある。

平泉の文化遺産は、この一〇の価値基準のうち、基準iiと基準viについて普遍的価値があると認められた。基準iiは「建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流またはある文化圏内での価値観の交流を表すものである」こと、基準viは「顕著な普遍的意義を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある」ことである。

基準iiに該当する根拠として、推薦書では、「平泉の仏堂・浄土庭園群及び考古学的遺跡群は、六世紀に中国・朝鮮半島から伝来し、日本古来の自然崇拝思想と融合しつつ、一二世紀にかけて独特の性質を持つものへと展開を遂げた日本の仏教、その中でも特に興隆した浄土思想に基づき、現世における仏国土（浄土）の空間的表現を目指して創造された顕著な事例である。それらは、仏教とともに受容した伽藍造営の理念及び意匠・技術を出発点とするのみならず、同時に受容した外来の作庭思想と古来の水辺の祭祀場における水景の理念、意匠・技術との融合をも出発点として、それに後続して成立・発展を遂げた日本の独特の仏堂・浄土庭園の理念及び意匠・技術の伝播の過程を証明している」と指摘している。

一方、基準viについては、「平泉が造営される過程で重要な意義を担ったのは、日本固有の自然崇拝思想とも融合しつつ、独特の展開を遂げた日本の仏教であり、その中でも末法の世が近づくにつれて興隆した阿弥陀如来の極楽浄土信仰を中心とする浄土思想である。それは、12世紀における日本人の死生観を醸成する上で重要な役割を果たし、世界の他の地域において類例を見ない仏国土（浄土）を空間的に表現した建築・庭園群などの理念、意匠・形態へと直接的に反映した。さらに、それらは宗教儀礼や民俗芸能等の無形の諸要素として、今日においてもなお確実に継承されている」としている。

平泉の五つの構成遺産

構成遺産の五つについて、推薦書の記述を参考にしながら改めて見てみよう。中尊寺（ちゅうそんじ）は国の特別史跡で、奥州藤原氏の初代清衡が一二世紀始めから四半世紀をかけて造営した寺院である。境内には、金色堂（こんじきどう）、金色堂覆堂、経蔵等の国宝及び重要文化財がある。また、鎮護国家大伽藍一区跡等、境内の全域が特別史跡に指定されている。中尊寺で最も有名な金色堂は、中尊寺境内北西側に位置する阿弥陀堂建築である。藤原氏四代の遺体及び首級をミイラとして安置した霊廟であり、平泉の政治・行政のみのならず、精神的な拠り所となっている。

毛越寺（もうつうじ）は国の特別史跡と特別名勝に二重指定されている。二代基衡が一二世紀中頃に造営した寺院の跡である。境内には、特別名勝に指定されている「浄土庭園」と、特別史跡及び特別名勝の構成要素である常行堂が含まれている。常行堂で行われる常行三昧の修法と「延年」の舞は、一二世紀における浄土思想の無形の要素として重要である。

観自在王院跡（かんじざいおういんあと）は特別史跡・名勝で、毛越寺の東に接している基衡の妻が建立した寺院である。発掘調査の結果、園池を中心として、南側には大小の阿弥陀堂が設けられており、阿弥陀如来の極楽浄土の表現を意図して「浄土庭園」が造られていたことが明らかとなっている。

無量光院跡（むりょうこういんあと）は特別史跡で、三代秀衡が12世紀後半に建立した寺院の跡である。西方に金鶏山（きんけいさん）が控え、園池に浮かぶ大小三つの島に翼廊付の仏堂と拝所・舞台をそれぞれ設けた空間構成は、「浄土庭園」の最も発展した形態と考えられている。

その金鶏山は史跡で、標高九八・六メートルの山である。山頂には経塚が設けられていた。浄土思想に基づいて完成された政治・行政上の拠点である平泉の空間設計の基準となった信仰の山である。

この他、世界遺産からは除外されてしまったが、柳之御所遺跡（やなぎのごしょいせき）という史跡がある。これは奥州藤原氏の住居であるとともに、政務の場でもあった「平泉館」と呼ばれる居館の跡である。初代清衡が造営した中尊寺金色堂、秀衡が造営した無量光院など、仏国土(浄土)を空間的に表現する建築・庭園とも空間上の緊密な位置関係を持つ。

金鶏山に沈む夕陽を見ながら

さて、この平泉の世界遺産を構成する遺産の一つ、無量光院跡から見て、その西方に見える平泉のランドマーク的存在、金鶏山の山頂に夕陽が沈む日が春先と夏の終わりの年二回ある。奥州藤原氏の下、百年の平和を謳歌した当時、ここには京都の平等院鳳凰堂を一回り大きくした同じような形の寺院があった。中央には阿弥陀如来が本尊として鎮座しており、年二回、夕陽が金鶏山に沈むその日は、夕陽の光が本尊の阿弥陀如来の後光となって輝き、この世の極楽浄土を体感できる仕掛けになっていたのである。

金色堂のある中尊寺、浄土庭園のある毛越寺、観自在王院、そしてこの無量光院、いずれも世界遺産の登録名にある通り、「仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」である。金色堂は「皆金色」と言われる仏の世界を具現化したものであるし、浄土庭園は文字通り、浄土の有様を庭園で表現したものである。

奥州藤原氏が三代に亘ってこうして様々な意匠を以て、浄土を表現してきたわけである。残念ながら源頼朝に滅ぼされた四代泰衡も、その治世が長く続いていたならばきっと、父祖とはまた違う形で浄土を表現したに違いない。

奥州藤原氏が実権を握るまでの長い間、東北は戦乱に明け暮れ、多くの人が亡くなった。なぜ奥州藤原氏がこうして、繰り返し繰り返し違う形で浄土表現し続けてきたのかと言えば、それは浄土というものが仏典にあるように十万億土のはるか遠い彼方にあるのではなく、今ここ、目の前にあるのだ、ということを伝えたかったのではないだろうか。

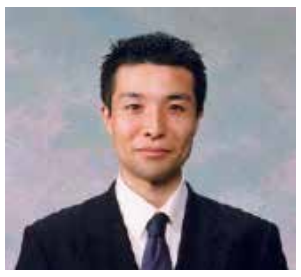
「中尊寺供養願文」にある有名な一節、「古来、奥州では、官軍の兵、蝦夷の兵の区別なく、多くの者の命が失われてきた。毛を持つ獣、羽ばたく鳥、鱗を持つ魚もまた、数限りなく殺されてきた。命あるものたちの御霊は、今、あの世に消え去り、骨も朽ち、奥州の土塊となり果てたが、中尊寺のこの鐘を打ち鳴らすたびに、罪なく命を奪われた者たちの御霊を慰め、極楽浄土に導きたいと願う」は、まさにそうした戦乱を生き延びた初代清衡の思いが詰まっている。

推薦書でも「現世における仏国土（浄土）の空間的表現を目指して創造された顕著な事例」とされている通り、まさにこれらは現世において浄土を創り出そうとしたその成果なのである。なぜ、この世の浄土を創り出そうとしたか、戦乱によって多くの人が亡くなり、生き延びた人にとっても、この世は地獄で、浄土は死んだ先にしかないという味方が支配的だったことだろう。しかし、それでもそうではなく、浄土はここにある、ここに浄土を創っていくのだ、ということを決意し、それを示したのが、これら平泉の世界遺産を構成する五つの遺産だということである。

金鶏山に沈む夕陽を見ながら、コロナ禍で大変な時ではあるが、日々のすべてをそれだけで覆い隠してしまうことなく、嬉しかったこと、楽しかったこと、幸せに感じたこと、ありがたかったことなど、しっかり心に留めて大事にしたいと強く思った次第である。「道の駅 平泉」では、金色堂がラベルにあしらわれた地ビールを購入できる。こうして美味しいビールが飲めるというのも、実にありがたいことである

執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

空海と清衡の過去そして仏教と東北の未来の事

今年頭における拙稿で、宇宙開発時代の死と再生を巡る思想に関連して、仏教の輪廻や涅槃についても甚だ浅学ながら言及したのであるが、実は一昨年の末頃に宮澤賢治への理解を少しでも深める為にと法華経を読み始めてから、その後最近にかけて肉親や勤務先の上司などの葬儀に関わる機が多かった事もあり、仏教について考える時間が増えていたのであった。

個人的な話だが、山形県庄内地方の実家そのものは曹洞宗の寺の檀家でありながら、私自身は幼少からの感覚とアイヌ民族の思想などからの影響によるアニミズム的な信仰心をより強く自覚しており、仏教に対しては信じる、と言うよりは、常に一歩引いた視点に立ってきたように感じている。

一方で、曹洞宗・臨済宗などの禅の思想が日本の美術や文学、茶道・菓子に至るまで影響を与え、また多くの欧米人の心を虜にし、その人生観を変えてきた背景などを知るにつけ、文化としての仏教、人々の共感装置としての仏教への関心が強まっていったのである。紀元前に既に失われた国に発祥し、開祖が「入滅」して以来長い年月に渡り多くの手によって多彩な経典が編まれてきた事から、仏教の宗派は多岐に分かれ、その教義には現代も議論の絶えぬ、一筋縄ではいかない点もある。「諸経の王」と呼ばれる法華経にすら見られる女性や障害を持った人々への差別意識と取れる表現は、仏教の平等思想を支柱として古代東北に建設された都市平泉の存在意義に楔を打ち込むようなものかも知れない。

古代インドから中国を経て国家的思想体系として日本に取り入れられた仏教はいかにして征服されゆく蝦夷の地・東北を北上し、また一方でいかに形を変えてこの地を潤していったのか。

その信仰の大河的風景の眺望を垣間見てみたい。

奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

＊

東北と仏教の関わりは聖武天皇の時代、奈良東大寺大仏造営に際し陸奥国より産出した黄金が献上された事、また同時代に陸奥国分寺や現岩手県二戸市の八葉山天台寺が建立された事に始まったと思われ、平安期にかけて円仁や妙達といった天台宗の僧による開基伝説を持つ陸奥の中尊寺や出羽の善寶寺が建立される。

また、蜂子皇子による開基伝説で知られる出羽三山には弘法大師・空海や修験道の祖・役小角（えんのおづぬ）の開基説もあり、長く真言宗に属する神仏習合の霊場であった（江戸期、湯殿山を除く月山・羽黒山は天台宗に改宗）。

ところで、空海はその出自を讃岐国の佐伯氏とし、自身はその生家を「昔、東国の毛人（蝦夷）征伐に功があった」と弟子らに遺言で語ったという。ところが、司馬遼太郎『空海の風景』によれば、毛人攻略に携わったのは中央の名門・大伴氏の一派である佐伯氏であり、讃岐の佐伯とはかつてヤマト王権に囚われ、全国へ移配された毛人そのもの、即ち「佐伯部（さえきべ）」であるというのだ。つまり、空海は少なくとも東国、現在の関東周辺の蝦夷の末裔であったという事になる。

では、空海は血族の縁故を感じ出羽三山へ？と考えたくもなるが、それは甚だ疑わしいと言わざるを得ない。というのも、空海はその著『遍照発揮性霊集』において、当時の天皇を美辞麗句を並べ賛美する一方で東方の蝦夷に対し、

「鬼の類であって、人間の同類にあらず」

「狼の獣心と蜂の毒針を備えた者ども」

「人間の顔をした獣であり、決して朝廷に心服しない」

と再三蔑視に満ちた差別的文言で表現し、見事な漢詩に遺しているからである。

これは一体、どういう心境であったのか・・彼は佐伯部の真実を知らずに蝦夷を異民族として罵倒していたのか、それとも知った上で錯綜した自意識の内に葛藤し、云わば開き直ったのか？今となっては知る由もない。だが、むしろ出羽三山に密教である真言宗が定着したのは、岩手県に今も根強く残るという隠し念仏（浄土真宗起源ながら密教の影響強く、幕府・教団両者から弾圧を受け続けた）を考慮するに、東北という歴史的暗部の濃い土地柄に合っていたという事なのかも知れない。

しかしながら、釈然としない思いがあるのである。

全く平気な様子で異民族差別を公言していた高僧・空海の広めた仏教と、陸奥・出羽両国における長年の戦の死者を敵味方の別なく、どころか人間のみならず獣や虫、草木に至るまで平等に供養しようと藤原清衡に平泉を建設せしめた仏教とは果たして同じものなのか。

確かに、空海が唐に渡り持ち帰った密教は、インドの土俗信仰ヒンドゥー教の影響を強く受け、故にカーストの思想に裏打ちされた差別的意識が内包されていたのかも知れない。無論、それは密教に限らず、帝釈天・大黒天・弁財天などヒンドゥーの神々を取り入れ、女性は仏になれない、女性は男性に変身する事で成仏できる、といった表現が見られる法華経ほか多くの経典を奉ずるほとんどの宗派に言えるのではないかとも疑われよう。中国に渡った仏教は中華思想の洗礼を受け、同じく異民族を迫害するを是とする日本に取り入れられ、差別的な国家宗教として広まったのだろうか。

だが、ここでそもそも仏教は何の為に生まれたのかという事を考えねばなるまい。開祖・釈尊が生まれた時代、現代のヒンドゥー教に連なる思想が生んだ階級差別が社会を覆っていた。

真理を追究する特権階級であるバラモン（司祭）の権威が弱まった時代、新たに身分を超越して出家・修行を始めた人々の中に若き釈尊がいたという。彼の出家の第一目的は、悟りを開く事自体よりも、「カーストに関係なく、誰でも真理に接触できる」という事実を命がけで証明する事にあったのかも知れない（その後インドではヒンドゥー教が再興し仏教は衰退したが、近年カースト最下層民の間に仏教が広まり、改宗が相次いでいるという）。

ヒンドゥー的なものに対するこの徹底抗戦から生まれる新たな思想こそが、東方の島国の東北・平泉の根本理念として清衡が救い上げた、仏教の神髄であったのではないか。例えその目前の経典が、ヒンドゥーの圧力や中国の中華思想、そして大和朝廷の侵略計画の下に汚されていたとしても、釈尊と同じく現世の苦しみに対峙していた清衡には、遠い時代の仏教の開祖の、その真意が見えたのではないかとも思えるのである。

ところで、仏教には何とも物騒な、遥か未来を見据えた予言めいたものが成立初期から存在していた。それが、末法思想である。

釈迦が説いた正しい教えが数百年後に衰退し、次第に形骸化して遂には仏法が滅び究極の乱世が訪れる、というもので、日本では平安末期に世相が荒廃して末法時代が現実味を帯びた。

その時代感覚から来る絶望感や諦観がもしかすると、奥州藤原氏四代・泰衡に鎌倉の狂奔した軍団からの仏教都市平泉の死守を断念させたのかも知れず、またそれまでの仏教の終焉を見届け、新たなる時代の仏教をこの日本から生み出さんとする気鋭の若僧たちの登場を促したのに違いない。

それら新たな時代の仏教―所謂鎌倉仏教は、浄土宗・浄土真宗・日蓮宗といった、修行や悟りを必要とせず、ひたすら信じて念仏や題目を唱える事で成仏できるとした、それまでの信仰形態を覆す云わばエキセントリックな宗派と、臨済宗・曹洞宗といった、従来の経典や教義に頼らず、禅の修行を通じて個々人の内面の仏性を発見するという、古来の信仰形態を新たな手法で発展させた云わばコンサバティブな宗派に大別できるのではないかと思う。

浄土真宗や日蓮宗は乱世からの民衆の救済を第一に、阿弥陀如来や法華経といった信仰対象を明確にした事で一神教に近いと言え、救われる方法など答が示されている分庶民にもわかりやすい点が強みである。

禅宗系はその逆で仏教古来の悟りに達する困難を伴なうが、修行内容はシンプルになり、また万物に仏を感じ、各人が日常から真理を具体的に体得する事、悟りを目的とする打算的観念を捨てる事など、哲学的に日本的な感覚や深み、思考の無限の可能性を感じられる点が魅力と言える。

東北には隠し念仏の大元である浄土真宗、宮澤賢治が信仰した日蓮宗も定着したが、他の地方より比較的に臨済宗・曹洞宗が広く普及している事実は、実家が檀家をしている手前、雰囲気などから何となく納得できるところがある。

これには、前出の出羽善寶寺など禅寺本山への、東北一円の世襲寺院からの修行の慣例が長く続いたという、保守的要因があると思われる。しかし、一休や沢庵、良寛など個性的な僧侶や上杉謙信、伊達政宗といった武士を育てた自己鍛錬の教えという側面は、屋内に籠って黙考する、真面目で忍耐強い北国の気質に、やはりこれも合っていたと言えるのかも知れない。

＊

発祥の地・インドで仏教が衰退した理由として、イスラム教徒による寺院の破壊以前に仏教が国による保護の下に安住し、民衆に奉仕する事を忘れて学派的活動に耽るようになった為、人々の心が離れていたという事情もあった。一方のヒンドゥー教は国が滅びても民衆に浸透していた事から衰退を免れたと言われ、日本でも徳川幕府の庇護を受けて尊大となった仏教寺院が明治維新後、廃仏毀釈の嵐に見舞われた事を思い起こさせる。人々の支持を失った時、仏教の命脈は絶たれるという事であろうか。

現代、日本の仏教は葬式仏教と揶揄されて久しく、その立場も葬儀業者の台頭によって脅かされ、宗教としての岐路に立っているとも言われているが、今世紀に入って仏教界は徐々に変わり始めたという声も聞かれる。不登校や自殺、終末医療の現場など、人々の苦悩に向き合う為の活動が、各地で芽吹いているというのだ。二〇一一年のこの地の震災が寺院を再び人々の救済の場へと変え、読経が多くの心を潤した時、仏教が本来の、人を育てる修練の道場へと回帰する、かつてほとんど想像されなかった未来をそこに見た者がいなかっただろうか。

仏教という名の長い時空の旅行者が、その身に絡み付いた浮世の欲垢や曲解を洗い流し、本来の姿に生まれ還る涅槃の地―それが実はここ、蝦夷の国であった事を、弘法大師・空海もまた長い旅路に悟られる日の来る事を願ってやまない。

伊達政宗の師・虎哉和尚が住職であった臨済宗・東昌寺（仙台市）

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

雲間からの陽射

トンノミ

シリーズ

遠野の自然

「遠野の白露」

遠野 1000 景より

現代人は「異界」への感受性が弱体化しているように思える。「異界」というと、いまどきの日本人はすぐお化けの世界のことを想起するがそうではない。

普段生活する日常の世界、見慣れた世界、あまり不思議なことが起きない世界とは別の世界のことだ。

今回の遠野の写真は、そうした「異界」が直接迫ってくるものが並んでいる。

日常の世界にぽっかりと空いた「穴」が入口。

「異界」に無防備で侵入すると混乱する。だから「異界」との境界が人を守る。

そして「魔物」から守るものも配置するのだ。

遠野の明るい自然とは別の世界がそこにある。

山中の鳥居

山中の社

山中の祠２

遠野の狛犬

遠野の狛犬４－２

遠野の狛狐

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

シリーズ　【東北の災害の歴史】　第３回

少し昔の時代まで水害だらけの列島だったことをすっかり忘れている
コンクリートによる河川改修工事だけで水害被害は防げない

令和元年　台風 21 号宮城県大郷町堤防決壊

令和 2 年　記録的大雨　山形最上川

平成 27 年　台風 18 号　宮城県二迫川決壊

昭和 50 年　津軽・十和田湖周辺大雨被害

日本列島は水害列島

シリーズ【東北の災害の歴史】の第３回目は「水害の歴史」を取り上げる。

最近、日本列島を含めた世界各地で地球温暖化の影響によるとされる大雨の被害が頻繁に報道されている。

ヨーロッパの市街を濁流が流れ、自動車を押し流す光景は衝撃的だ。

国内においても、西日本で頻繁に発生した水害も尋常なレベルを超えていたし、長野の千曲川氾濫も記憶に新しい。その同じ台風は宮城県にも大きな洪水被害をもたらした。

しかしよくよく考えてみると、この日本列島は、ずっと大昔から水害列島だったのではないかという気がするのである。

もちろん頻度や規模の大きさ、大雨が続く期間等の違いはあるが、列島の大雨被害が最近になって急激に増加したとは思えない。

近年に至るまでも、毎年のように台風は頻繁に列島を通過するし、台風でなくとも、大雨はよくあった記憶がある。

また日本列島は、国土が狭く、河川の長さも短いために高低差が大きく、流れは激しく、大雨が降れば洪水が発生しやすいのだ。

五十年ほど前、堤防決壊は頻繁だった

筆者は宮城県のいなか町の出身である。いまから五十年以上前の小学校低学年の時には、その小さな町を流れる川の堤防がたびたび決壊して、川から数百メートルも離れていた自宅周辺まで流れ込んできた水で、歩くのも大変だったことを思い出す。

他の地域でも同様のことがあったのではないか。

また当時、学校では、日本では河川に上流から大量の土砂が流れ込み、そのため川底が浅くなるので、大量の雨が降ると洪水を引き起こすと教えられていた。

治水はリーダーの責務だった

もっと昔の日本列島、江戸時代やそれ以前では、地域の河川の治水、特に水量が増えてたびたび氾濫するような「暴れ川」を治めることは大名はじめ、地域の領主たちの責務だった。

その治水に成功しないと、米等の作物に甚大な被害をもたらし、住民が困るだけでなく、領主も困る。領地は貧乏になってしまう。

だから治水対策に最大限の努力を惜しまなかった。そうした歴史が厳然と存在してきた。

こうした水害の歴史が、この列島に絶えることなく続いてきたのではないか。

だからこそ、現代においても、列島の水害対策は怠りなく必要だということではないだろうか。

自然災害対策について過信はないか

したがって、日本列島の水害に関する限り、十年前の大地震と大津波のときに用いられた「未曽有」という言葉は使わないようにしたいものだ。

昭和の時代、水害が発生するたびに、護岸工事で堤防を補強してきた。ダムも作ってきた。コンクリートブロックで川の流れを緩やかにしてきた。大都市部では下水施設も充実させて、雨水対策を施してきた。

そうした努力によって、いつしか水害は克服できるという感覚に慣れてしまっていたのではないか。

そうしたところに、近年経験したことがない大量の雨を降らせる台風が襲来して被害が出てあわてているようにも見える。

あるいは、長年の観測データに基づく雨水対策はどんな時も万全だという幻想が破れてあわてているのかもしれない。

あたかも、十年前の東日本大震災同様、本来は予想しえない自然災害なのに、対策は十分だとの過信が大いに影響しているのではないかと思うのである。

コンクリート護岸工事はいまでも有効か？

筆者は、コンクリート護岸工事による雨水対策以上に、雨が地中に染み込みやすくなるような対策、あるいは木の葉っぱ一枚一枚が雨水を短い時間でもとどめておき、大量の水の洪水となって被害をもたらすのを防止する対策も有効ではないかとも考えている。

あるいは、それらの対策と蛇行する河川のコンクリート護岸工事との折衷による対策の方が有効ではないかとも感じている。

自然災害対策に万全はない

やはり、列島の自然災害への対策に万全ということはないということだと思う。

たとえ、人間の手により、ある程度の対策をしたとしても、耐えうる限度があり、常にその限度を共有することこそが最大の災害対策ではないかと考える。

そして万が一、その限度を超える水害が予想されるときは、迅速に避難することが重要であると思うのだ。

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

写真で
お伝えする
東北の風景

写真撮影
尾崎匠

【岩手の晩夏】

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.